

要 旨

児童の豊かな人間性をはぐくむには、何よりも「食」が重要である。食に対する高い意識をもたせることで、よりよく食べようとする意欲や態度を身に付けさせられると考える。本研究では、児童の食に対する意識を高めるために、総合的な学習の時間において、食に携わる人とのかかわりやポートフォリオを活用した振り返りを取り入れた活動を展開した。「健康」「地域」「感謝」に視点を置いた取り組みによって、体によいものを選んだり、地域の食への関心が高まったりする児童が増えてきた。また、食に感謝する気持ちの高まりも見られるようになった。

〈キーワード〉 ①健康 ②地域 ③感謝 ④食に携わる人とのかかわり ⑤振り返り

1 研究の目標

食を関連付けた総合的な学習の時間において、食に携わる人とのかかわりを通し、自分の食について適切に判断しながら行動しようとする力をはぐくむ指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

食育基本法の前文では、「子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくためには、何よりも『食』が重要である。」¹⁾と述べられている。この法律が制定された背景には、栄養バランスの偏った不規則な食事の増加（「健康」に関する問題）や産地偽装等の食の安全性に関する問題（「地域」に関する問題）、食に感謝する心の欠如（「感謝」に関する問題）など、食に関する様々な問題が増加し、もはや家庭だけでは解決できないレベルになっていることが挙げられる。いつでもすぐに好きな物が食べられるといった現在の食環境は、これらの問題を助長し、子どもの健全な成長に悪影響を及ぼしているとも言われている。

佐賀県教育の基本方針においても、学校における食育を推進することが明記されており、具体的な施策として、学校だけでなく地域の食育に携わる人などと連携しながら、食に関する指導の充実を図ることが述べられている。子どもの豊かな人間性を育成するためには、食に携わる人とのかかわりを通して、食に関する「健康」「地域」「感謝」の意識を高め、自分の食について適切に判断しながら行動しようとする力をはぐくむ必要があると考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

食を通じた活動の中で、食に携わる人とかかわる必然性のある場面を設定したり、「健康」「地域」「感謝」に視点を置いた振り返りを仕組んだりすれば、食に対する意識が高まり、自分の食について適切に判断しながら行動しようとする力をはぐくむことができるであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 食育や総合的な学習の時間・ポートフォリオの活用法に関する理論研究
- (2) 児童の実態調査と、食に携わる人とのかかわりや振り返りの活動を効果的に取り入れた総合的な学習の時間の単元開発
- (3) 検証授業の実施と児童の変容を基にした仮説の有効性の検証

5 研究の実際

(1) 研究の全体構想

文部科学省による「食に関する指導の手引」では、6項目の食に関する指導の目標を示している（資料1）。この目標と本校児童の実態を照らし合わせた上で、特に次の3つに視点を当て、研究を進めることにした。

1つ目は「健康」である。健康によい食べ物について児童が追究することは、栄養や添加物に関する正しい知識を身に付けたり、健康を支える食事の重要性について理解を深めたりすることにつながると考える。2つ目は、「地域」である。地域の産物や旬へ児童が関心をもつことで、安心・安全な食への意識が高まると考える。3つ目は「感謝」である。食生活は生産者をはじめ多くの人々の苦労や努力に支えられていることを児童が知り、その人たちの考えや思いに直接触れることで、食への感謝の気持ちがはぐくまれると考える。

これらを高めるために、次の2つの手立てを活動の中に取り入れた（図1）。なお、食を自分の問題として児童が切実に受け止め主体的に解決していくことが、学習内容の定着につながると考え、問題解決学習の時間が十分に確保できる総合的な学習の時間において活動を展開することにした。

ア 食に携わる人との必然性のあるかかわり

新富康央は、「児童が切実な課題をもつことは、課題解決や探究活動に意欲的、主体的に取り組む上で重要である。」²⁾と述べている。児童の食への意識を高め、食にかかわる理解や判断力を身に付けさせるためには、「〇〇さんから話を聞きたい」「〇〇さんに見てもらいたい」という切実な思いで食に携わる人とかかわらせることが重要だと考える。本単元では、上記の3つの視点において、食の流通・管理に携わる仕事をしているJA職員、地域で食育を推進している婦人会、食に関する専門的な知識をもつ栄養教諭とかかわる必然性のある場面を設定した。

イ 話し合いやポートフォリオを活用した振り返り

今までの活動を次の活動や実生活に生かすためには、振り返りの活動が不可欠であると考え。振り返りの方法としては、全体あるいは課題別グループでの話し合いによる振り返りや、個人におけるポートフォリオを活用した振り返りの活動を取り入れることにした。

(2) 授業の実際

ア 単元名「大豆博士になろう！」（第4学年 男子20名 女子12名 計32名 全50時間）

イ 単元の目標

「大豆博士になろう！」という活動において、食にかかわる健康や地域、食への感謝の意識を高め、自分の食について適切に判断し行動しようとする意欲や態度をはぐくむ。

ウ 指導計画の概要

「大豆からできる食べ物について調べてみたい。」「自分たちで大豆を育てて、大豆の料理を作りたい。」などの児童の意見を基に、本単元を「大豆にくわしくなろう」「『多久の健康おやつ』を開発しよう」という2つの小単元から構成した。

- 食事の重要性
- 心身の健康
- 食品を選択する能力
- 感謝の心
- 社会性
- 食文化

資料1 食に関する指導の目標

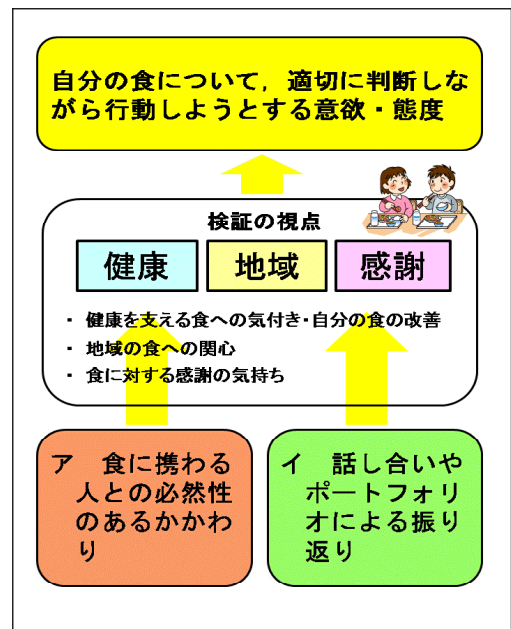


図1 研究の全体構想図

(ア) 小单元1「大豆にくわしくなろう」(全20時間)

児童は、大豆が「畑の肉」と呼ばれる理由を探るために、栄養教諭から大豆の栄養についての話を聞き、その後、豆腐や味噌、醤油などの大豆食品についての調べ活動を行うことになった。また、児童は実際に大豆の栽培活動も行い、「おいしい大豆を育てたい。」という思いから、農家の方やJA職員とかかわり、大豆畑を見学させてもらったり栽培に関するアドバイスを受けていたりするとともに、その人たちの苦労や思いに触れることができた。

(イ) 小单元2『多久の健康おやつ』を開発しよう(全30時間)

小单元1で栽培した大豆を使ってどのような活動を行うかを話し合った結果、『健康』と『地域』をテーマにした『多久の健康おやつ』を開発するという活動を行うことになった。下は主な活動の流れである。なお、検証授業(5時間)はこの小单元で実施した。

主 な 活 動 内 容	※ () 内数字: 時数
○ 自分たちで育てた大豆を使った活動内容について話し合い、活動計画を立てる。(2)	
○ 大豆を収穫する。(2)	
○ 「多久の健康おやつ」をグループごとに考案・試作する。(6)	
○ よりよいおやつにするために、栄養教諭・婦人会から「健康」と「地域」についてのアドバイスを受ける。(2)	
○ アドバイスを基に、おやつの再検討を行う。(3)	
○ 栄養教諭と婦人会を招いて「多久の健康おやつ」の試食会を開き、「健康」と「地域」をテーマにしたおやつをアピールする。(3)	
○ 学習のまとめとして、食の大切さを地域の人や保護者に伝えるための学習発表会を開くことを決定し、計画を立てる。(2)	
○ 食に携わる人の思いを知るために、栄養教諭とJA職員から話を聞く。(1)	
○ これまでの学習を振り返りながら発表の内容を決定し、準備を行う。(4)	
○ お世話になった地域の人や保護者らを招き、学習発表会を行う。(1)	
○ 1年間の学習のまとめを行い、「自分の成長」「これからの自分」についてレポートにまとめる。(4)	

(3) 児童の変容と考察

先に述べた2つの手立てを取り入れた活動によって、児童の食にかかわる「健康」「地域」「感謝」の意識が高まり、自分の食について適切に判断しながら行動しようとする意欲や態度が表れれば、その手立ては有効であると考え、各視点における児童の変容を見取り、考察を行った。

ア 食を通じた健康への意識について

「多久の健康おやつ」を開発する活動において、児童とともに2つの条件を設定した(表1)。その1つである「体にいい」という条件について、考案・試作の後、グループごとに児童は話し合いによる検討会を行った【振り返り】。その中で、「栄養が偏っているから、バランスよくしたい。」「どのような添加物が体に悪いか知らない。添加物について知りたい。」などの課題が出た。そこから、栄養教諭から児童はアドバイスをもらいたいという切実な思いが生まれた【かかわり】。アドバイスを受ける前と受けた後に、それぞれの条件について、◎(条件を十分満たす)、○(だいたい満たす)、△(余り満たさない)の3段階による自己評価をさせ【振り返り】、それを数値化(◎:3点、○:2点、△:1点)したところ、健康に関する項目でアドバイス後の数値の平均が上昇していることが分かる(次頁図2)。また、アドバイスを受けた後のワークシートには、「緑の食品であるかぼちゃを使うことで、栄養バランスをよくしたい。」「着色料がたくさん入っているトッピングのチョコレートは、使うのをやめよう。」など、栄養教諭のアドバイスを取り入れた児童の記述が多く見られた【振り返り】。これらのことから、栄養教諭との必然性のあるかかわりによって、児童の健

表1 おやつの条件と評価項目

条件	〈条件1「健康」〉 体にいい	〈条件2「地域」〉 多久の自慢になる
評価規準		
評価項目①	栄養バランスがよい	多久らしさが出ている
評価項目②	添加物を使っていない	多久でとれた材料を使っている

康への意識が高まったと考える。

イ 地域の食への関心について

もう1つの条件「多久の自慢になる」を満たすために、長年多久に住み、多久の食にも精通している婦人会の方から児童はアドバイスをもらいたいという思いが生じた【かかわり】。アドバイスタイムでは、婦人会の方に対し「多久で昔から食べられてきた食材は何ですか。」「多久で〇〇を作っている人を知りませんか。」など、積極的に質問する児童の姿が見られた。「地域」についての自己評価においても【振り返り】、アドバイス後の数値が高まっていることが分かる(図3)。

単元の終末の段階では、グループによる学習発表会を設定した。発表内容について話し合う中で、食の大切さを参観者に訴えたいという児童の気持ちが高まった。そのためには、食に携わる人の気持ちを知る必要があるという思いが児童の中に生じたため、栄養教諭とJA職員の方を招き、食に対する思いや願いを話してもらうことになった【かかわり】。ゲストティーチャーとの打ち合わせにおいて、地域の農業の現状や地元産の食材のよさなどを話してもらうようお願いし、児童の地域への意識を高めるようにした。その結果、授業後の感想【振り返り】では、地域の食への意識の高まりを示す記述が多く見られた(資料3)。

「おやつの完成度を高めたい」「発表会を成功させたい」という切実な思いが婦人会やJA職員とのかかわりにつながり、「地域」に視点を当てた振り返りによって児童の地域の食への意識を高めることができたと考える。

ウ 食に対する感謝について

前述の、食に携わる人の思いや願いを知るために栄養教諭とJA職員から話を聞く活動【かかわり】では、地域の食に関する話とともに、食に携わる様々な人の思いを代弁してもらうこともお願いした。自分たちの食を支える人への感謝の気持ちをもたせることで、食べ物を大切にしていこうとする意欲や態度をはぐくみたかったからである。「食べ物にはたくさんの人たちの思いや願いが詰まっている。」という内容の話を、児童はうなずきながら真剣に聞いていた。授業後の感想【振り返り】には、生産者だけでなく、管理・流通に携わる人、調理する人など、食を支える様々な人への感謝の気持ちが高まったことを示す記述が見られた(資料4)。食に携わる人の思いや願いに直接触れ、「感謝」に視点

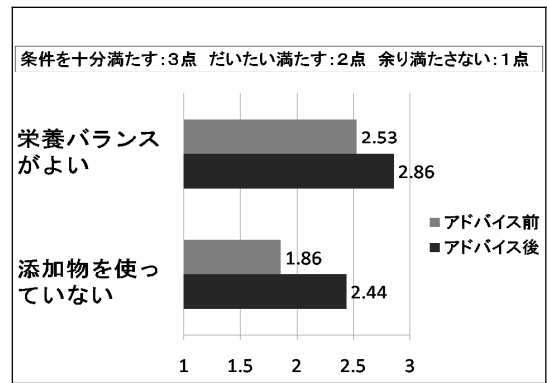


図2 条件1「健康」に対する自己評価

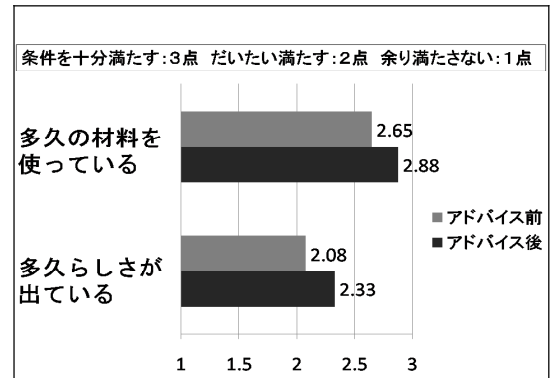


図3 条件2「地域」に対する自己評価

- どこで穫れたのか分からない野菜より、多久で穫れた野菜の方が安心で安全だということが分かりました。これから多久の野菜を選んでいきたいです。
 - 今までは旬などを全然考えずに食べていました。今日の話で、旬のよさが分かりました。旬のとれたての野菜は体にもいいし、最高だろうなあと思いました。
 - 地域のものをたくさん食べると、農家の方も嬉しいし、野菜が売れて助かると思います。
 - 家でも野菜を育てて、新鮮でおいしい野菜を食べたいと思いました。
- ※ ~~~~~ : 地域の食に対する意識の表れ

資料3 感想から見取れる地域の食に対する意識

- 食べ物にはたくさんの人の努力が詰まっているので、感謝することは大事なことだなあと思いました。
 - 野菜には、やっぱり農家の努力があるんだなと思いました。私は、農家の方の努力をむだにしないように、感謝して食べたいです。
 - これからは野菜を作っている農家の人や料理を作ってくれるお母さんのことを考えて、頑張って最後まで食べるようにしたいです。
- ※ ~~~~~ : 感謝の気持ちの表れ

資料4 感想から見取れる感謝の気持ち

を当てた振り返りを行ったことで、食への感謝の気持ちが高まったと考える。

(4) 抽出児の食に対する意識の変容と考察

抽出児としてA児の変容を追った。A児は野菜が苦手で、家庭ではほとんど野菜を食べていなかった。学校では、給食で野菜の入った献立が出ると残そうとすることもあったが、教師が野菜の量を減らしてやると頑張っけて食べていた。一方、お菓子が好きで、コンビニエンスストアから好きなお菓子を自分で購入し、よく食べていた。

「多久の健康おやつ」を考える話し合いの中で、最初にA児が出したのは「甘くておいしいおやつがいい。」という、自分が食べたいもののイメージを優先させたアイデアであった。また、材料も「チョコレートを使いたい。」と述べるなど、新鮮な材料、安心・安全な材料へのこだわりは見られなかった。そこで、A児の考えをおやつ作りの条件である「健康」と「地域」に向かせるために、食に携わる人からおやつに対するアドバイスを受ける時間を設定した。食べ物の専門家である栄養教諭や、地域で食育を推進している婦人会の方から、「甘すぎない方が体にいいのでは。」「多久で穫れたものを使えば、多久らしいおやつと言えそうだね。」などのアドバイスを受けたことで、A児の考えに「健康」や「地域」を意識したと見られる変容が見られた(表2)。また、「今まで考えたり学んだりしてきたことを、できるだけ生かしていこう。」と声を掛け、振り返りにポートフォリオを活用させたことで、「本当に条件に合ったおやつになっているだろうか。」と確認しながら、グループのメンバーとともに再考案する姿が見られた。

表2 A児のワークシートや感想に見る「健康」「地域」「感謝」への意識の表れ

「健康」への意識の表れ	<ul style="list-style-type: none"> 砂糖を使うことにしていたけど、黒砂糖や蜂蜜の方が体によいと聞いたので、変えたいと思う。体にいいように、量も少し減らしたい。(2時目) お母さんも、〇〇先生(栄養教諭)も、私たちの健康を考えてくれているので、これからもっと食べ物のことを詳しく調べたりして、健康に育っていきたいです。(5時目)
「地域」への意識の表れ	<ul style="list-style-type: none"> 多久名物の「多久饅頭」のおじさんに聞けば、多久らしさを出す秘密が分かるかもしれない。(1時目) 多久でとれた材料をもっと使うようにしたい。(2時目) 〇〇さん(JA職員)の話を聞いて、地元でとれた物の方が安心で安全だということが分かりました。だからこれからは、なるべく多久でとれた物を選びたいです。(第4時目)
「感謝」の気持ちの表れ	<ul style="list-style-type: none"> 婦人会の人や〇〇先生のおかげで、体によくおいしいきなこあめができました。ありがとうございました。(3時目) 食べ物はたくさんの方の努力が詰まっているので、これからは感謝して考えながら食べていきたいです。(4時目)

4時目には、栄養教諭とJA職員の方を招き、食べ物にはたくさんの方が関わっていることや、消費者のことを常に考えながら食に携わる仕事をしていることなどを話していただいた。A児の感想には「これからは野菜を残さないようにしたい。」と書かれていた。理由を問うと、「農家の人もお母さんも頑張っけて(て作ってくれ)たから、私も頑張っけて食べたい。」と答えた。

A児のワークシートへの記述や授業での発言などから、栄養教諭や婦人会、JA職員とのかかわりによって、A児の食への意識が高まり、自分の食生活を改善しようとする意欲や態度につながったものと思われる。また、3つの視点を明らかにし、ポートフォリオを活用して教師とともに活動を振り返らせたことも、A児の食への意識を高めることに効果的であったと考える。

(5) 単元を通しての児童の変容と考察

食への意識の高まりによって、自分の食について適切に判断しながら行動しようとする力がはぐくまれたかを見取るために、単元のまとめの段階において作成した児童のレポート(単元を振り返りながら「自分の成長」と「これからの自分」についてまとめたもの)と、単元前と単元後に行った保護者に向けてのアンケート調査で、児童の変容を見取った。

レポートにおける「これからの自分」に関する記述には、「健康」「地域」「感謝」に対する意識の高まりから、自分の食生活をよりよくしていこうとする内容の記述が見られた(次頁資料5)。

また、保護者アンケートでは、「健康」「地域」に関する質問に「とても当てはまる（4点）」「やや当てはまる（3点）」「余り当てはまらない（2点）」「全く当てはまらない（1点）」の4段階で回答してもらい、数値を平均した結果、「健康」「地域」を意識した食にかかわる児童の行動が単元後に増えたことが分かった（図4）。また、保護者のコメントから、家庭でも食への感謝の気持ちをもって行動している児童がいることが明らかになった（資料6）。

- ・ 赤・黄・緑の栄養バランスを考えて食べたい。健康に育ちたい。「健康」
- ・ 安心・安全な多久や佐賀県の食べ物を選んで食べたい。「地域」
- ・ 家でも野菜を作って食べてみたい。農薬は使わないようにする。「地域」
- ・ これからはできるだけ料理を手伝うようにしたい。「感謝」
- ・ 「いただきます。」「ごちそうさま。」を言わないことがあったけど、これからは必ず言いたい。「感謝」

資料5 レポートから見取れる食への意識

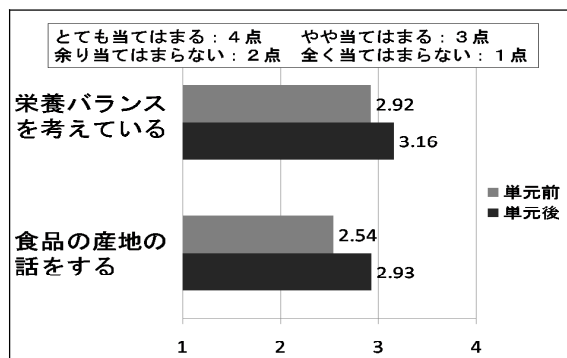


図4 保護者アンケートの結果

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究を通して、自分の食について適切に判断しながら行動しようとする意欲や態度をはぐくむための単元作りのポイントが明らかになった。

ア 児童が「話を聞きたい、教えてほしい」という思いをもち、食に携わる人とかかわる必然性が生じるような単元を構成する。ゲストティーチャーには、こちらの意図を事前に伝えておき、それに留意しながら児童に接してもらうようにする。

イ 活動の振り返りにおいて、それまでの学習内容を次の活動に生かすことができるよう、ポートフォリオを活用させる。単元の終末には、教師がかかわりながら単元全体を振り返らせ、自分の成長を実感させるとともに自己の生き方を考えることができるようにする。

ウ 「健康」「地域」「感謝」を視点にした単元を構成し、その3点に意識が向くような活動を展開する。

(2) 今後の課題

ア 食への関心を高められるような家庭との連携の在り方について、研究を深める。

イ 食べ物や、それをはぐくむ自然に対し感謝できるような手立てを工夫する。

- ・ 食事の準備をしていると、「何か手伝うことはない？」と聞いてくるようになりました。
 - ・ 好き嫌いが少なくなったような気がします。「せっかく農家の人が作ってるのに、残したらいかんもんね」と言って何でも残さず食べてくれます
- ※ ~~~~ : 食への感謝から生まれた態度

資料6 保護者のコメントから見取れる食への感謝

《引用文献》

- 1) 食生活指針情報センター 「食育基本法」
<http://www.e-shokuiku.com/kihonhou/index.html> (2008年3月)
- 2) 新富 康央 『学力が伸びる評価がわかる授業が変わる総合的な学習の展開』
 2003年 ぎょうせい p.22

《参考文献》

- ・ 文部科学省 『食に関する指導の手引』 平成19年3月
- ・ 佐賀県教育委員会 『佐賀県教育の基本方針』 平成19年4月